

池見澄隆著

## 『中世の精神世界』

### ——死と救済——

自著について語るのには、あたかもじぶんのヨメさんについてしゃべるようなものだ。いったい、どこまでノロケることが許されるのか見当もつかないし、さりとて心にもない謙遜はかえてみっともない。所詮これは至難のワザだと気づいたとたん、筆をとる気になった。本の周辺をうろつくことから始めてみよう。本書のいわば前生譚から——。

もともとこの仕事は、K・Y氏（現富山大学教授）との共著という企画でスタートした。もう数年まえにさかのぼるが『中世の心象風景』というタイトルでまとめあげるはずであった。ところが、途中で氏の勤務先が京都から現在の大学に移った。そのため、ふたりの綿密な討議をふまえた共同執筆という当初の方針がムリになったのである。しかし、出版社としてはこの企画や構想、また執筆者との機縁など、捨てきれぬものがあつたのであろう。以後、編集者は、私の既発表の論文をまとめ、単著の形で出版することに大変な

熱意をしめしてくれた。なにごともしっくり腰をすえてかかるタイプの私は、編集者との切の約束をいくたびとなく破り、そのつど編集者は温顔と激励で応じてくれた。

本書は、過去十三年間に発表した十三篇の論稿を中心に、全体の一貫性をあたえるためのプロローグとエピローグを付したもので、「他者の死」「自己の死」「もうひとつの信仰」の三部に編成した。

「他者の死」において、日本人の死をケガレとみる観念や習俗の根づよさを見据えながら、それに対して仏教、とくに浄土教がいかに対応したかを明らかにし、中世が神道による死穢の観念の再編と、浄土教による死穢の克服の時代であったと論じた。死をケガレとみる観念には、おのれの死をどう解決するかの問いかけはない。その一点を衝いたのが浄土教であった。浄土教が、死を往生としてとらえたとき、新しい問題として浮上したのが「自己の死」である。こうして中世の精神は自己の死というテーマをめぐって展開する。

従来、他者の死Ⅱケガレ論は主に民俗学のテーマとして、また自己の死は文学や哲学のテーマとして論じられてきた。これらを同一の視点からとらえ、しかもそのような「死」

を中世精神史の基本的な枠組として提起したものは、他にないように思われる。

「もうひとつの信仰」は中世精神の重層性や、見落されがちな側面を明らかにした。

全体をつらぬく問題意識は、現代日本仏教の悪しき代名詞ともいうべき「葬式仏教」への再検討である。より具体的にいえば、葬送儀礼と救済論の架橋の試みであった。その模索のなかで、浄土教とシャーマニズムの交錯による生死観形成の意義や、看死儀礼の重要性などが問題としてあらわになってきた。今日の宗教や医療の現場でもっとも欠落しているものを中世精神に求め得るのではないか。

上梓のあと、いくつもの反応があつた。活字になったもの（読売新聞・朝日ジャーナル・正論・月刊住職・医療<sup>85</sup>）から書簡や口頭・電話にいたるまで反響の大きさと多彩さにとまどうほどであったが、書評をめぐってひとつ貴重な体験があつた。「批評とはおのれを語るもの」という発見である。

一六〇・七・二三。再版をひかえて。

（いけみ ちようりゅう 文学部助教授）

（昭和六十年二月 人文書院発行）  
本文三〇〇頁 二、四〇〇円